

# 東京の創造力と市民の創造力をシンクロさせ 新たな社会関係資本を生み出す

## 「東京ビエンナーレ2020」

東京ビエンナーレ2020総合ディレクター  
アーティスト／東京藝術大学絵画科教授

中村政人  
なかむら まさと

2020年夏から東京で、国際芸術祭「東京ビエンナーレ2020」を開催する。

「芸術祭」とは言っても、昨今全国で開催されているような行政主導の「芸術祭」ではない。市民主導でありアーティスト主導という点で他の国際芸術祭とは一線を画すものだ。

### 東京の新しい創造的活動を 連鎖させる文化フレーム

1990年代から国内外でアーティスト活動を行うなかで、海外のさまざまなアートシーンを目撃し、その成り立ちについて考えてきた。アートシーンを生み出すことは可能なのだろうか？と。そもそもアートシーンは、美術館などの限定された場所だけから生まれるものではない。地域のなかで

活動するアーティストがそれぞれにアクションを起こし、そのオルタナティブな活動が長年積層し、その地域の表現活動がアートシーンの基礎体力となる。地域因子(地域資源)をアーティスト(個)の活動により新たに発芽する「気づき」が得られたとき、その地域因子の成長プロセスは、創造的プロセスとなり飛躍的に街(全体)のビジョンとしてつくられていく。そしてそのビジョンを実現すべく市民(個)が創造的なアクションを開始したとき、街の創造力は市民の創造力とシンクロし始める。つまり「東京ビエンナーレ」とは、個と全体の関係を相互的に刺激し東京の新しい創造的活動を連鎖させる文化フレームといえる。それは、世界的な視点で東京を1つの生きている創造体としてとらえ、その創造体を構成する市民一人ひとりの心なかに宿る文化、芸術意識を創造的に開化していくアートプロジェクトである。



東京ビエンナーレ

TOKYO  
BIENNALE

2020



大勢の人が行き交う街なかで、目の前に座った人のためだけに音楽を生演奏するパフォーマンス作品  
Pedro Cameiro Silva and Ardalan Aram (Free Seat - Encounter) 2018, Photo by Ardalan Aram

時の調べ  
Essay

## ソーシャルダイブ 〜東京にダイブし社会と深く交わる

舞台となる東京というまちは、明治維新以降、江戸を受け継ぎ近代都市国家の首都としてユニークな骨格を持つ。東京ビエンナーレは、江戸から続いてきた基層文化に、現代の社会の空気を反映させ新たな文化の層を積み重ねていく試みでもある。

東京ビエンナーレの特徴を表すプログラムの1つが「ソーシャルダイブ」だ。「東京にダイブし社会と深く交わること」をミッションに、国内外の参加アーティストを募った。ソーシャルダイブには国内からは100件、海外からは1500件以上もの応募があった。それは、「東京」と「ビエンナーレ」という2つの言葉の強い魅力もあると思うが、「東京」という都市とかわりながらの作品制作にチャレンジしたいアーティストが世界中に多いことの流れでもある。

## 「見なれぬ景色へ―純粹×切実×逸脱―」 〜アート文脈にとどまらず社会全体で 考えたい〜

「見なれぬ景色へ―純粹×切実×逸脱―」。これが東京ビエンナーレ2020で掲げるテーマだ。

表現することの『純粹』さ、市民や社会に対峙する時の緊張感・『切実』さ、常識を覆すまたは時代の先を行く『逸脱』の3点がクロスするところに「芸術」としか言い表せない行為や価値が見いだされてくる。この考え方を主軸に全体で約64組のアートプロジェクトの参加が決定している。どれもいわゆる置物的な作品ではなく、場の力を喚起し、市民

の創造性を引き出す、全く新しい体験を生み出すものだ。そうした「見なれぬ景色」を都市にいづくつも仕掛け、新たな体験を通じ自発的な気付きをもたらすのがアーティストの仕事だ。「純粹×切実×逸脱」という言葉は、アートという文脈にとどまらず、社会全体で考えていくテーマとなり得るだろう。

ニューヨークやパリ、ロンドン等、主要都市と比較してもアーティストが滞在、制作、発表しにくい都市「東京」。この東京の経験値を変えるべく、まちなかに深く入り込み、まちの人たちと一緒にアクションを起こす。東京ビエンナーレ期間中、同時多発的に起こる活動は、東京を読み替え、次世代の新たな創造的価値を開拓し、新しい文化のフレームを生み出すことにほかならない。

「東京ビエンナーレ2020」にご期待いただきたい。

◆開催日時…2020年7月12日(日)〜9月6日(日)  
57日間(予定)

◆会場…千代田区、中央区、文京区、台東区の4区にまたがる東京北東エリア



内藤礼《無題》2009(2008-)  
神奈川県立近代美術館鎌倉  
Photo by 島山直哉

### 略歴

1963年秋田県大館市生まれ。アートを介してコミュニティと産業をつなげ、文化や社会を刷新する都市創造の仕組みをつくる社会派アーティスト。第49回ヴェネツィア・ビエンナーレ日本代表。平成22年度(第61回)芸術選奨受賞。2018年日本建築学会文化賞受賞。1997年よりアート活動集団「コマンドN」を主宰。秋田県大館市等で地域再生型アートプロジェクトを多数展開。プロジェクトスペース「KANDADA」(2005〜2009年)を経て、2010年より民設民営のアートセンター「アーツ千代田 3331」(東京・千代田区)を立ち上げ。2011年より震災復興支援「わわプロジェクト」(2012〜2017年)に東京・神田につ「TRANS ARTS TOKYO」企画・実施。2015年、個展「明るい絶望」開催。2016年よりプロジェクトリーダーを育成する「プロジェクトスクール@3331」を開校。2018年より「東京ビエンナーレ」を開始。著書に「美術と教育」「新しいページを開け!」など。



※新型コロナウイルス感染症の影響により会期・会場などは変更になる可能性があります(2020年3月現在)